

「ポートフォリオ」「アクティブ・ラーニング」など様々なカタカナ用語の教育方法が「輸入」されている中、教育の基本である「発問」を今一度見直したい。発問次第で授業、学生の学習意欲の喚起、学生の学習状況までも把握ができる。この「発問」について、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の中井俊樹教授に解説してもらった。

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授

中井俊樹

問われるとは考えるも、学習者に対する効果的な発問について長年の「ハーバード白熱教室」として日本でも有名。発問と研究されている。発問と呼ばれる理由

「ハーバード白熱教室」として日本でも有名になったマイケル・サンデル教授は、学生への問いかけの方法が優れている。1000人を超える学生が集まる大講堂の中で、「自分の兄弟が万引きしているのを見つけたら、あなたは警察に通報するだろうか」、「君は養子をもろうとき、その子に値段をつけられるかな」などの問いをきっかけにして、主要な哲学者の思想と関連つけて議論を深めている。

学習者に問いを与えながら考えを深めさせる行為は、「発問」と呼ばれる伝統的な教育技法である。古代ギリシャのソクラテスは弟子との問答を通じて、思考を深めていた。教育学において

「発問」と呼ばれる行為は、教育の基本である。発問次第で授業、学生の学習意欲の喚起、学生の学習状況までも把握ができる。この「発問」について、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の中井俊樹教授に解説してもらった。

一時間での発問の数は、二〇問から五〇問という調査結果もある。良質な問いを学生に与えることは、学生が自身で問いをつくる能力を向上させることにもつながる。自分で問いを設定して、学問分野の方法に基づいてその答えを明らかにしていくという研究活動は、大学ならではの学習と言える。優れた授業は、授業の中で学生

の注意を引きつけ学習意欲を喚起することができる。たとえば、単に統計データを表で見せるのではなく、事前に「昨年の日本における自殺者数は何人か」、「自殺者数は男女で違いがあると授業内容を理解させていく。そして、授業のまとめの部分で、再度確認することにより、学生の学習の成果を把握することができる。

主発問は授業の中で何度も活用されるものである。授業の導入の部分で提示することで、学生に何が重要な問題なのかを理解させることができる。また授業の展開部分では、主発問を軸にして授業内容を理解させていく。そして、授業のまとめの部分で、再度確認することにより、学生の学習の成果を把握することができる。

授業における「発問」を理解する

学生の思考を焦点化・拡張

(上)



「発問」と呼ばれる行為は、教育の基本である。発問次第で授業、学生の学習意欲の喚起、学生の学習状況までも把握ができる。この「発問」について、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の中井俊樹教授に解説してもらった。

「発問」と呼ばれる行為は、教育の基本である。発問次第で授業、学生の学習意欲の喚起、学生の学習状況までも把握ができる。この「発問」について、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の中井俊樹教授に解説してもらった。

「発問」と呼ばれる行為は、教育の基本である。発問次第で授業、学生の学習意欲の喚起、学生の学習状況までも把握ができる。この「発問」について、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の中井俊樹教授に解説してもらった。

「発問」と呼ばれる行為は、教育の基本である。発問次第で授業、学生の学習意欲の喚起、学生の学習状況までも把握ができる。この「発問」について、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の中井俊樹教授に解説してもらった。

「発問」と呼ばれる行為は、教育の基本である。発問次第で授業、学生の学習意欲の喚起、学生の学習状況までも把握ができる。この「発問」について、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の中井俊樹教授に解説してもらった。

中井俊樹

効果的に発問する
前解説した通り、教員が学生に対して教育的な意図を持って問う行為を「発問」と言う。「宇宙はどのように始まったか」と思いますが、「死刑制度は廃止すべきだと思いますか」、「普遍的な価値は存在すると思いますか」といった教員の問いかけは、学生の知的好奇心を刺激し、思考を促すことができる。ここでは、授業において効果的に発問を活用する方法を紹介する。

発問を明確にする
複雑な発問や曖昧な発問は学生に混乱を与えてしまう。発問を明確にすることが重要である。そのため、一度に一つの発問にするべきである。教員はさまざまなことを学生に考えてほしくなるが、一度に複数の発問があると学生の思考は混乱する。複数の発問に対して考えさせたい場合は、複数回にわたって学生に考えさせるようにする。

また簡潔な表現にすることも重要である。学生が何度も確認しないとわからないような長く複雑な発問はよいとは言えない。答えが多様になるような発問はよいと言われることがあるが、発問自体は明確にすべきである。

一方、オープンクエスチョンは、「なぜ愛媛県の人口が減少しているのでしょうか」のように、学生が自分なりの答えを自由に答えられる発問である。学生に深く考えさせるには、オープンクエスチョンを効果的に活用することが求められる。考えるための時間を与える。

多様な種類の発問活用
発問にはさまざまな種類がある。単純な基礎知識を答えさせるものだけでなく、事象を比較させたり、原因を考えさせたりするなど思考を深めていく発問を使うべきである。下表は、人口減少に関するさまざまな種類の発問を整理したものである。

また、クローズドクエスチョンとオープンクエスチョンを授業の場面によって使い分けるとも必要だ。クローズドクエスチョンは、「愛媛県の人口は減少していますか」のように、学生が「はい」「もしくは」「いいえ」で答えられる発問である。このような発問は、「はい」と考える人は挙手して「はい」と指し、自発的に発言する学生も出てくるかもしれない。

自発的に発言する学生に対しては、その行為自体をほめてあげることができると言える。また、意見や質問に対してすぐに答えて終わりにせずに、「他の意見はあるかな」と他の学生に振り向けたりしてよい。

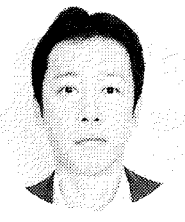
適切な指示を与える
発問の後、沈黙の時間をとるだけでなく、具体的な指示を与えることも有効である。たとえば「この問題はなぜおきるのでしょうか」と発問した後、問を置かずに「その原因は三つあり、……」と教員が説明したら、学生自身に考えさせる機会を失ってしまう。経験の少ない教員にとって「沈黙の時間」は落ち着かないかもしれないが、沈黙が学習を促進する場合があることを理解しておく必要がある。学生が考える時間をしっかりとっておく。

ある程度時間をとれば、自発的に発言する学生も出てくるかもしれない。発問に対して、考える時間をとった後に「格差を広げると考える人は手を挙げてください」という指示を与え、「そのように考えた根拠を教えてください」とつなげることができる。ただ考えさせるのではなく、書かせたり議論させたりせず、せめて挙手させたりすることで学生の思考を促すことができる。このように、発問は指示と組み合わせ使用することで学生の学習を深めていくことができる。

授業において「発問」を活用する

ソクラテス式問答法も効果的

(下)



教師が学生を指名し、意見を報告させることは重要なことである。無作為に指名することもあれば、表名するものもある。この場合、ノートに記述、これがおもしろい。でも、まだまでの学習の理解度などから、意図的に指名してよい。経験ある教員は、無作為の指名と意図的な指名を発問の内容によってわけているようにある。教員による指名は、学生にいつ指名されるかわからないという緊張感を与えることで学習活動に責任感をもたせることができる。

発問をした後に、学生が授業の内容をどの程度理解しているのかを確認することもできる。ある程度は学生の表情で学習状況を把握することはない。相手の主張をより確かにするために反論する立場の人を、「デビル・アドボケート」と呼ぶ。

たとえば、学生のある主張に対して、「本当にそう言い切れるのでしょうか」、「このような場合、あなたの意見はありますか」、「この問いには、あなたはどの程度自信を持っていますか」といった問いかけによって、深く考えさせることができる。そして、現代のソクラテスに発問を効果的に活用する教育技法として、ソクラテス式問答法がある。古代ギリシャの哲学者であるソクラテスが好んで用いた技法をもとに名づけられたものだ。

表 さまざまな種類の発問

基礎知識	「出生率はどのような計算式で求めることができますか」
比較	「都市と地方では人口減少にどのような違いがありますか」
動機や原因	「なぜ人口減少が起きているのでしょうか」
行動	「人口減少に対して国は何をすべきでしょうか」
因果関係	「都市への若者流入は、人口の増減にどのような影響を与えていますか」
発展	「この授業で私が説明した以外に少子化の原因はありませんか」
仮説	「子育て支援が進めば、人口の減少が抑制されますか」
優先順位	「少子化対策の中で最も有効な方法は何かでしょうか」
総括	「A市の少子化対策の事例からどのような教訓が得られますか」

出所:デビス(2002), p.102より筆者作成

学生の回答に合わせて、教員は新たな問いかけを続ける。その際に、教員は学生の主張の弱点を中心に問いかけをしていく。そのような一連の問いと答えによって、学生の学習を深めていく。

ソクラテス式問答法の例として、教員「若者の学力は低下していると思いますか」
学生「若者の学力は低下しています」
教員「若者の学力低下をどのように知りましたか」
学生「新聞です。学力低下は記事によく取りあげられています」
教員「新聞では、どのような根拠で学力低下の記事を書いていますか」
学生「……」
教員「国際比較調査の結果がグラフになっているのを記憶しています」
教員「国際比較調査ではどのような能力を評価されていますか」
……
ソクラテス式問答法は、学生を深く考えさせるものの課題もある。ひとつは、学生の回答にあわせて臨機応変に対応しつつ、授業の目標につながるよう進めなければならないことである。また、学生が議論の中でノートをとりにくいという点で不満をもつ場合もある。教員にとっては難易度の高い技法と言えるが、伝統的な教育技法に挑戦してはどうか。 (おわり)